

## シンポジウム報告

### 「多様化する初年次教育

#### —教師の関わり方についての可能性を探る—

中澤 務

#### 1. シンポジウムの趣旨

本シンポジウムは、2006年12月3日に、関西国際大学とくろしお出版の共催で開催されたものである。詳細は下記のとおりである。

##### シンポジウム

多様化する初年次教育—教師の関わり方についての可能性を探る—

と き 12月3日(日) 13時15分～(開場 12時45分)

ところ 東京芸術劇場 5階大会議室

(東京都豊島区西池袋 1-8-1 JR池袋駅西口すぐ)

##### ◆基調講演

演名 篤氏(関西国際大学学長)

##### ◆話題提供

上村和美氏(関西国際大学初年次教育研究開発センター助教授)

笹金光徳氏(高千穂大学教授・教務委員会委員長)

中澤 務氏(関西大学文学部助教授)

##### ◆パネルディスカッション

司会・コメンテーター 沖清豪氏(早稲田大学文学学術院助教授)



シンポジウムの様子

本シンポジウムは、くろしお出版により企画されたものであり、表題からもわかるとおり、近年の初年次教育の多様化の中で、教員の側がどのように初年次教育に関わっていくべきかという問題に焦点を当てている。初年次教育のあり方は画一的に語れるものではなく、それぞれの大学の規模の違いや、学生の質的差異などによって、多様な可能性を持つ。そうした多様な可能性を、三つの大学の具体的な取り組みの姿の中に探ろうというのが、このシンポジウムの趣旨である。

筆者は、話題提供者の一人としてこのシンポジウムに参加した。本報告では、「話題提供」における三人のパネリストの報告内容を、筆者の報告を中心にまとめるとともに、その後に行なわれたパネルディスカッションの内容について報告することにした<sup>18</sup>。

## 2. 「学習技術」とプレゼンテーション教育 関西国際大学 上村和美

最初の報告者である上村和美氏は、関西国際大学での初年次教育科目「学習技術」と、その延長線上にある「プレゼンテーション演習」の紹介をおこなった。

「学習技術」は、大学生の学習・研究に必要な技術（テイク・ノート、リーディング、情報収集の方法、レポートの書き方、プレゼンテーションなど）を学ぶ導入科目である〔スライド2-4〕。半期13回の授業で、12名の担当で運営している。統一教材や「授業資料」、補助教材を活用することで、クラスによる差が生じないように工夫している〔スライド5-7〕。授業は、テキスト『知へのステップ』を使用し、ワークシートによって展開される。ワークシートは授業終了時に回収し、翌週返却する。学生はそれをファイリングする。また、授業の展開は、「教授資料」によって指定されている〔スライド8-12〕。

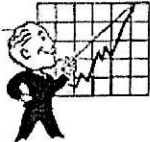
こうした「学習技術」の延長線上にプレゼンテーションがある。「プレゼンテーション演

<sup>18</sup>話題提供に先立って行なわれた、濱名篤氏（関西国際大学学長）による基調講演「初年次教育と教育改革」については、本報告書に所収されている、国立教育政策研究所主催の講演の報告（「初年次教育の歩みと今後の展望 ～日本とアメリカの事例・実践から～」、平成18年6月30日）と重なる部分が多いので、ここでは省略する。

習」では、インタビューと他者紹介、ポスター発表、レジユメの作成、コメント・質問など、プレゼンテーションに関わる様々なスキルを学習する。テキストとしては、『プラクティカル・プレゼンテーション』を使用している [スライド 16-18]。プレゼンテーションには「説明のプレゼンテーション」と「説得のプレゼンテーション」があり、いずれも「書くプレゼンテーション」と「話すプレゼンテーション」に分けることができる。このうち、スタディ・スキルでは、ゼミや研究発表などにおいておこなわれる口頭発表（説明・話す）の技術を取り扱う [スライド 19-22]。この授業においても、ワークシートや評価シートが活用される [スライド 25-26]。

「学習技術」で学んだプレゼンテーションが、「プレゼンテーション演習」において、さらに実践的なコンテンツを使った訓練を繰り返すことによって、スタディ・スキルがさらにブラッシュアップされ、完成されていく仕掛けになっている [スライド 28]。

「学習技術」とプレゼンテーション教育




2006.12.3 (日)

関西国際大学  
上村和美

「学習技術」で学ぶスタディ・スキルズ

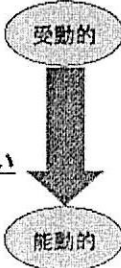
大学生の学習・研究に必要な技術例)

- ※ テイク・ノート
- ※ リーディング
- ※ 情報収集の方法
- ※ レポートの書き方
- ※ プレゼンテーション

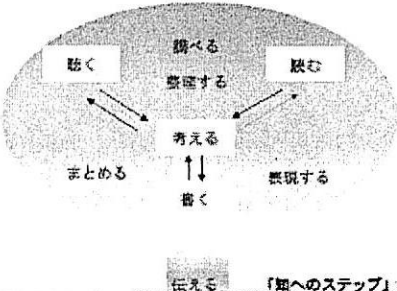


テイク・ノートを例として

- ※ 高校  
=大切なことは必ず板書される  
→ノートに書き写す
- ※ 大学  
=大切なことは必ずしも板書されない  
→自分で大切なことを聴き取り、  
自分でノートにまとめる



「学習技術」で学ぶスキル



「知へのステップ」p13より

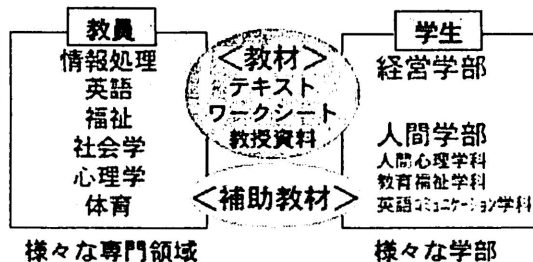
## 平成17年度・春学期の実施環境

- 半期13回（ガイダンス1回+授業12回）
- 受講者は約400名  
（2学部・3学科・16クラス・留学生クラスもあり）
- 科目担当者は12名
- 学生個人が所有するノートパソコンも活用
- 複数教員で担当するチームティーチングだが、統一教材や「教授資料」、補助教材の活用等によりクラス差は生じない。
- 毎回ワークシートを実践し、提出。翌週には添削して返却される。

## 「学習技術」年間実施状況

学期	春学期	夏学期	秋学期	次学期 部中
対象	・春入学の 日本人学生 ・秋学期入 学（前年度） の留学生	再履修者	春入学の留 学生	再履修
クラス数	経営学部 6クラス 人間学部 9クラス 留学生 1クラス	両学部で 1クラス	両学部で 1クラス	両学部で 1クラス

## 等質のクラス運営のために

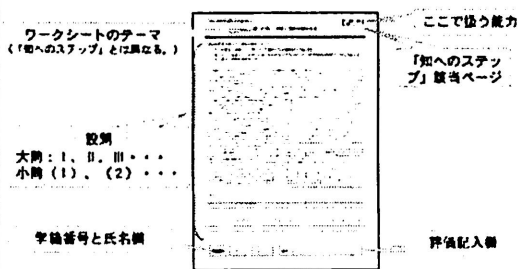


## 『知へのステップ』の構成



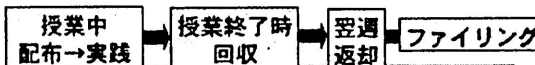
- 第1章 スタディ・スキルズとは
- 第2章 ノート・テイキング
- 第3章 リーディングの基本スキル
- 第4章 より深いリーディングのために
- 第5章 大学図書館における情報収集
- 第6章 インターネットによる情報収集
- 第7章 情報の整理
- 第8章 アナログ・ライティングの基本スキル
- 第9章 効果的なアカデミック・ライティングのために
- 第10章 パソコンによるライティング・スキル
- 第11章 プレゼンテーションの基本スキル
- 第12章 わかりやすいプレゼンテーションのために

## ワークシートの構成 (例：第3章)



## ワークシートの活用例

- 各回の授業は、ワークシートを中心に展開する。
- ワークシートはテストではない。その時間の内容を表す「あらすじ」であり、スキルを身に付けるための「しかけ」である。
- ながれ

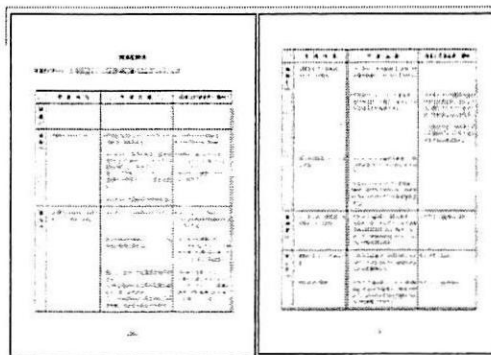


### 教授資料 (例：第3章)



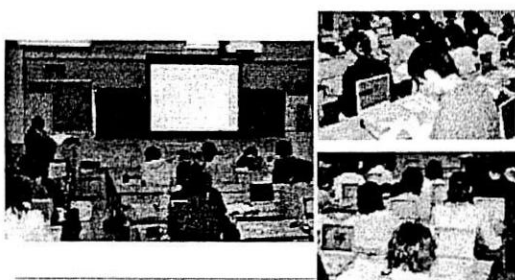
- わらい
- 解説
  - バックグラウンド
  - ワークシートの解説
    - 解答例
    - 指導上の留意点
    - 評価のポイント
    - フィードバック
    - 参考文献
- 授業展開例

11



12

### 授業風景



13

### 受講生たちの感想

- レポートの書き方がわかった。  
→従来はレポートの書き方はもちろんのこと、レポートがどのようなものであるのかも理解できないまま提出していた。
- 大学生としての学習への取り組み方がわかった。  
→自発的・能動的な態度が大切。
- 大学生としての勉強方法がわかった。  
→図書館は本を借りるだけのところではなく、他大学の図書館も活用できることがわかった。

14

### 「学習技術」の意義

- 高等学校と大学との接続  
→学習に対する姿勢 受身から自発へ
- 全クラスで等質の教育内容  
→必修科目のためクラス差が生じないようにする
- 専門科目に入るまでの準備期間  
→「レポートとは何か」を理解したうえで専門へ

15

### 学習技術とプレゼンテーション

- 「学習技術」
    - テイク・ノート
    - リーディング
    - 情報収集の方法
    - レポートの書き方
    - プレゼンテーション
- 発展 → プレゼンテーション演習

16

## 「プレゼンテーション演習」で学ぶスキル

何をどのように伝えるか

例)

- インタビューと他者紹介
- セルフチェック
- 空間の説明
- 段取りを考える
- マトリックスで思考する
- ポスター発表
- レジュメの作成
- 時系列で考える
- プランニング
- コメント・質問

17

## 『プラクティカル・プレゼンテーション』の構成



- Unit1 クラスメイトを紹介しよう!
- Unit2 セルフチェックをしよう!
- Unit3 異業交流の枠を説明しよう!
- Unit4 研究会の幹事をしよう!
- Unit5 レシートのコンテンツを発表しよう!
- Unit6 ポスターを作ろう!
- Unit7 レジュメを作ろう!
- Unit8 1年層をふりかえろう!
- Unit9 異業会議場の使用プランをたてよう!
- Unit10 コメント・質問をしよう!

18

## プレゼンテーションとは

- \* **プレゼンテーション**  
= 「紹介」「発表」「報告」「提案」  
例) もともとは広告業界の用語  
広くは、自己紹介、スピーチ、履歴書なども

→スタディ・スキルズで扱う**プレゼンテーション**  
= 調査・研究した内容を大学のゼミや研究発表会、学会などで発表する(口頭発表)

説明のプレゼンテーション

19

## プレゼンテーションの種類

### 書くプレゼンテーション 話すプレゼンテーション

- 例) レポートや論文
  - 記号性がある
  - 何度も読める
  - 相手の反応がわからない
  - 文字+表・グラフでの表現
- 例) 口頭発表
  - 記録されない
  - 一度きり
  - 相手の反応がわかる
  - 文字+表・グラフ+「声」での表現

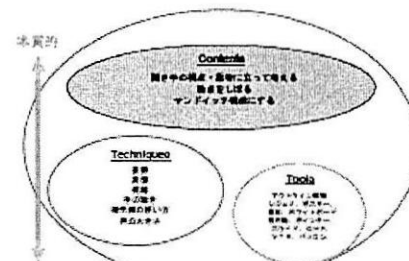
20

## 目的別プレゼンテーション

	話すプレゼンテーション	書くプレゼンテーション
説明のプレゼンテーション	・授業、ゼミ、研究会や学会での発表	・報告書 ・レポート ・論文
説得のプレゼンテーション	・企業家の発表 ・採用試験での面接 ・販売行為(セールス)	・企画書 ・採用応募のための書類 ・販売促進の印刷物

21

## プレゼンテーションの構成



『プラクティカル・プレゼンテーション』p3より

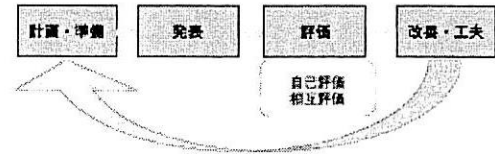
22

## 平成17年度の実施環境比較

	学習技術	プレゼンテーション 演習
必修・選択 の別	必修	選択
受講者数 (クラス数)	400名 (17クラス)	40名 (2クラス)
担当教員数	12名	1名

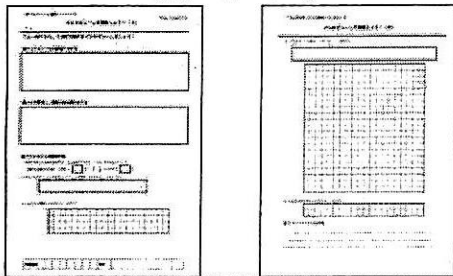
23

## プレゼンテーションスキルをアップするために



24

## ワークシートの構成 (例: Unit 1)



25

## 評価シートの例 (例: Unit 1)



26

## プレゼンテーション演習 第1回 「クラスメートを紹介しよう!!」



27

## まとめ



「学習技術」で学んだプレゼンテーションスキルは、「プレゼンテーション演習」で実践的なコンテンツを使い、発表を繰り返すことで、さらにブラッシュアップされる。

初年次におけるスタディ・スキル教育の完成

28

### 3. 高千穂大学における統合的初年次教育の実践 高千穂大学 笹金光徳

高千穂大学の沿革と概要、教育理念について述べられた後、初年次教育導入のきっかけと取り組みが説明された。高千穂大学において「ゼミⅠ」を中心とする初年次教育が始められたきっかけは、基礎学力の低下、入学目的の希薄化、学習意欲低下、不本意入学などに由来して生じた、成績不良者・留年生の増加、不就学者・退学者の増加、就職活動の苦戦、卒業生の不就労などの問題であり、こうした問題への対処が考慮されている。

「ゼミⅠ」の教育目標は、「気づき」と「自己発見」であるが、その目標の達成のために、四つのコンセプトを立てている。すなわち、(1) 大学へのスムーズな接続、(2) スタディ・スキルの獲得、(3) 課題探求型学習、(4) キャリア意識の醸成である。

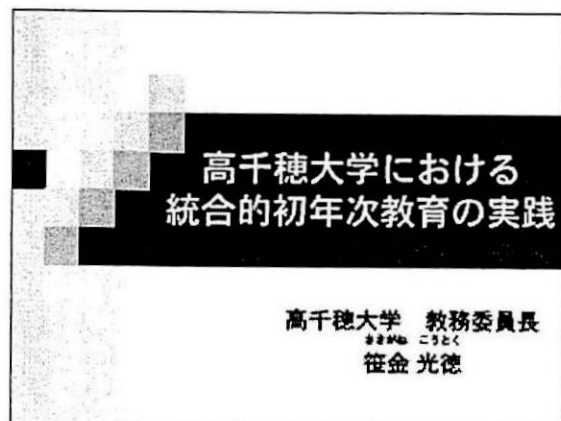
(1) 大学へのスムーズな接続：入学者が大学生活にスムーズに接続できるように、フレッシュャーズ・オリエンテーション（一泊二日の研修）を実施。

(2) スタディ・スキルの獲得・(3) 課題探求型学習：統一シラバスを作成し、授業を展開している。（最初は共通の教科書を指定し、50数名の専任教員が同じ授業を行っていたが、教科書に対する抵抗が強く、改めたとのことである。）

(4) キャリア意識の醸成：キャリア・アセスメントを実施。

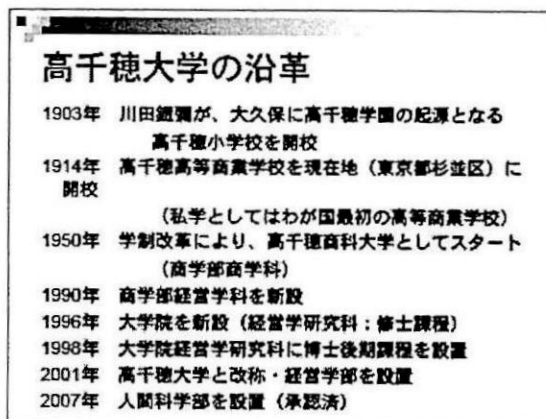
これらを有効に進める手段として、「ガンバレ高千穂 10分勝負」（一般教養を高めるための、一種のリメディアル教育）を実施。また、アドバイザー制度を導入し、「高千穂マスタープラン」をプログラム化している。「ゼミⅠ」の実施においては、担当者会議を設け、大学の他の組織と連携しながら、修正・改善を行なっている。

「フレッシュャーズ・オリエンテーション」に対する学生の満足度は高く、冒頭に上げた成績不良者・退学者の減少、就職の改善等につながっている。



高千穂大学における  
統合的初年次教育の実践

高千穂大学 教務委員長  
\* \* \* \* \*  
笹金光徳



高千穂大学の沿革

- 1903年 川田鑑彌が、大久保に高千穂学園の起源となる高千穂小学校を開校
- 1914年 高千穂高等商業学校を現在地（東京都杉並区）に開校  
（私学としてはわが国最初の高等商業学校）
- 1950年 学制改革により、高千穂商科大学としてスタート（商学部商学科）
- 1990年 商学部経営学科を新設
- 1996年 大学院を新設（経営学研究科；修士課程）
- 1998年 大学院経営学研究科に博士後期課程を設置
- 2001年 高千穂大学と改称・経営学部を設置
- 2007年 人間科学部を設置（承認済）



## 大学の概要

- 商学部商学科
  - マーケティングコース
  - 金融コース
  - 会計コース
- 経営学部経営学科
  - 経営管理コース
  - ビジネスコミュニケーションコース
  - 起業・事業経営コース
- 人間科学部人間科学科 (H19年度から)
  - 人間科学専攻
  - 児童教育専攻

学生数(学部生) 約2500人

## 学風の指針

「常に半歩先立つ進歩性」

||

先見性 + 積極性 + 実現性

## 学風の目標

心の交流を大切に

「偏らない自由人」

スケールの大きな

「気概ある常識人」

グローバルな視野を持つ

「平和的国際人」

## 問題意識

- 基礎学力の低下
- 学習意欲不足
- 入学目的の希薄化
- 不本意入学



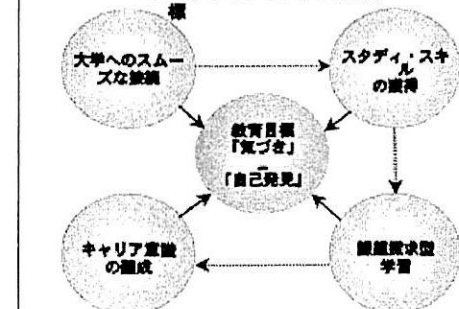
- 成績不良者・留年生
- 就職活動での苦戦
- 不就学者・退学者
- 不就労卒業生

「ゼミ」を中心とした初年次教育の展開

## 取組の実施プロセス

- 平成12年頃からの問題意識・検討
  - ↓
  - 平成13年 具体的検討開始
  - ↓
  - 平成14年 スタート
  - ↓
  - 平成16年 改革
- コンセプト見直し
- 継続的改善

## ゼミのコンセプトと教育目標



### ゼミ1のコンセプトと具体的な施策

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開
- キャリア・アセスメント
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

### ゼミ1のコンセプトと具体的な施策

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開
- キャリア・アセスメント
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

### ゼミ1のコンセプトと具体的な施策

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開
- キャリア・アセスメント
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

### ゼミ1のコンセプトと具体的な施策

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開
- キャリア・アセスメント
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

### ゼミ1のコンセプトと具体的な施策

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開
- キャリア・アセスメント
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

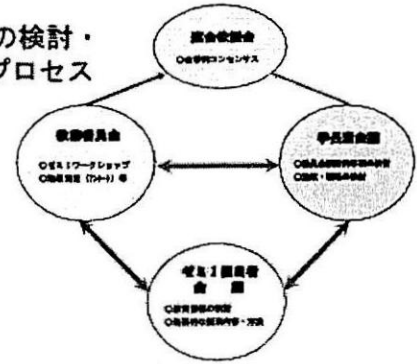
### 取組の特性

- 基礎学習能力向上を目的とした全学統一プログラム
- 諸種の施策・ツールが有機的に機能する統合システム
- 多様な学生に対する個別サポート
- 建学の理念・教育理念を反映した教育

### 取組の組織性

- 取組実施へ向けての組織的な検討・決定
  - 各施策の全学的・組織的な実施・運営および協力体制の確立
  - 修正・改善のための組織的な検討・決定
- 計画→実行→評価→改善 サイクルの確立

### 諸施策の検討・決定プロセス



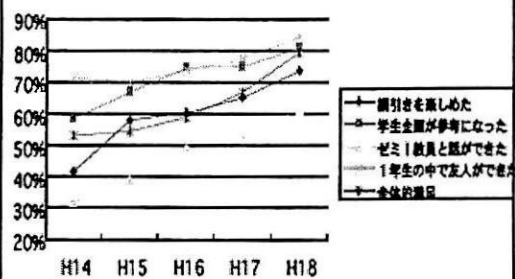
### 取組の有効性

- 有効性の評価手段
  - ・フレッシュャーズ・オリエンテーション学生アンケート
  - ・ゼミ1学生アンケート
  - ・ゼミ1教員アンケート
  - ・専門ゼミに関するアンケート

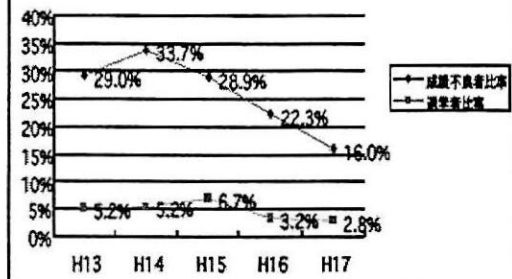
### 取組の成果

- フレッシュャーズ・オリエンテーションに対する学生の満足度
- 成績不良者・退学者の減少
- 大学教育の成果発表の場であるゼミ発表会の参加パート数の増加
- 就職内定率の改善や不就労卒業生の減少

フレッシュャーズ・オリエンテーション学生アンケート結果



1年生の成績不良者・退学者比率の推移

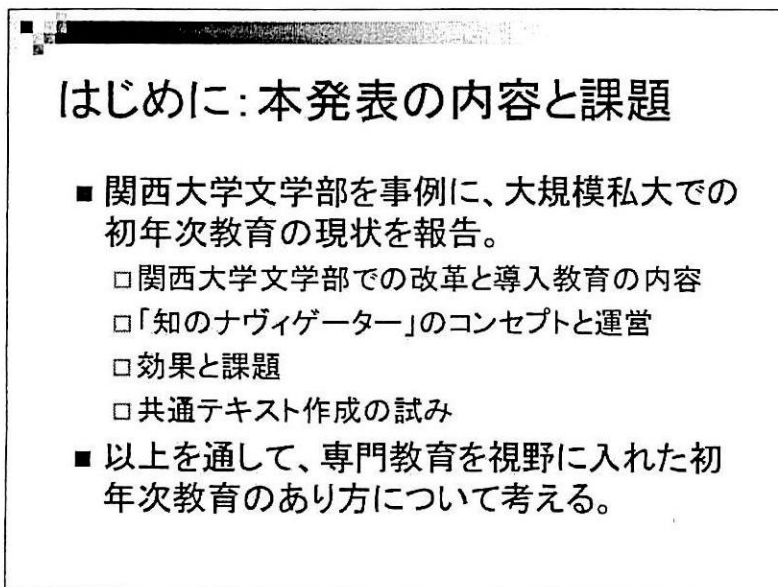
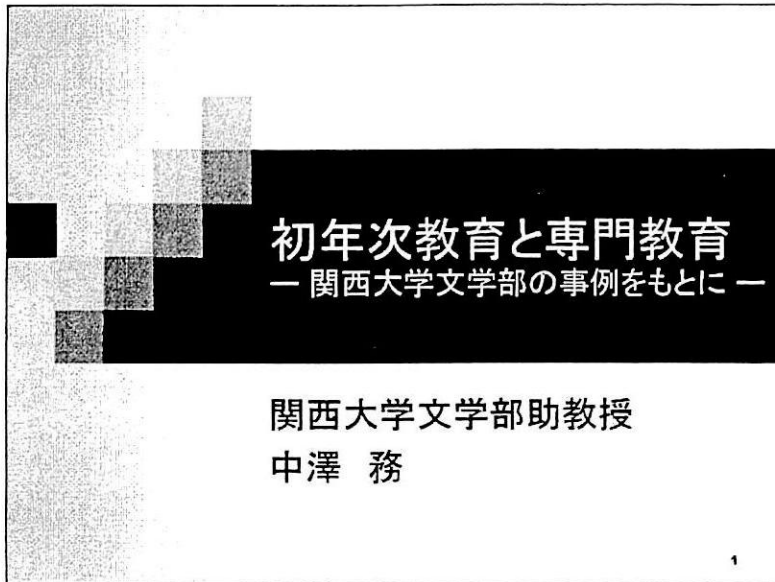


## 今後の実施計画

- 組織的FDによる教育方法の改善
- 高千穂マスタープランと学生生活目標管理シートの上級生への展開
- コミュニケーション・ツールとしてのWeb, モバイル環境の整備
- 学生データベースの構築

#### 4. 初年次教育と専門教育 —関西大学文学部の事例をもとに— 関西大学 中澤務

次に、筆者の行なった報告の内容を、報告において使用したパワーポイント・スライドを参照しつつ、まとめて行くことにしたい。



関西国際大学や高千穂大学などの比較的小規模な大学に対して、関西大学のような大規模大学は、教員間の合意形成が容易でなく、とりわけ初年次教育のような、これまでの大学教育にはなかったような新しい教育をおこなう際には、その弱点が強く現れる。具体的事例として、関西大学文学部の初年次教育への取り組みを詳しく紹介しながら、専門教育を視野に入れた初年次教育のあり方を考える。

## 1 関西大学文学部の学部改革

- 関西大学について
  - 1886年、関西法律学校として創立。
  - 現在7学部。専任教員615名、学生数2万8千人。
  - 「関関同立」の一つ。
- 関西大学文学部の学部改革
  - 2004年度より8学科制を廃止して、1学科多専修制に移行。2007年度より18専修体制。
  - 一括入学して、2年次に専修分属。
  - これに伴い、1年次生用導入カリキュラムを新設。

3

①関西大学の紹介。

②関西大学文学部で2004年度より始まった学部改革の紹介。

## 2 文学部の初年次導入教育

- 関西大学文学部の導入教育の目的
  - 大学の勉学への適応。
  - 自分が学ぶ専門分野の選択と、準備。
- その内容
  - (1)「学びの扉」
    - 各専修が開講。各専門分野の入門講義。[専門]
  - (2)「知へのパスポート」
    - 各専修が開講。専門分野への導入ゼミ。[専門]
  - (3)「知のナビゲーター」
    - スタディ・スキルの獲得など。春学期のみ開講。[汎用]

4

関西大学文学部での初年次導入教育の主要目的は、大学の勉学への適用にあり、これは従来の初年次教育の流れの中にあるが、もう一つ、関西大学文学部での新しい学修システムに由来する目的を持つ。すなわち、専門分野の選択と、専門的学びへの準備という目的である。

こうした目的を達成するために、文学部では、三つの初年次科目を設定している。「学びの扉」と「知へのパスポート」は、各専門分野への導入としての役割を果たす。これに対して、「知のナビゲーター」は、スタディ・スキルの獲得を目指す。

### 3 「知のナビゲーター」の内容

#### ■ 目的

- スタディ・スキル(ステューデント・スキルを含む)の獲得。

#### ■ 運営方法

- 専修横断的に担当者(16名)を選定。
- 1クラス25名。金曜1限目に一斉開講。
- 希望者多数の場合は抽選。
- 教育内容の縛りはなし。修得目標のみ共有。
- 定期的に打ち合わせ会議をおこなう。

6

「知のナビゲーター」は、16名の教員によって実施されており、金曜1限目(他の必修科目のない時間帯)に一斉開講される。1クラス25名の少人数制。教育内容は、修得目標のスキルのみを掲げ、具体的な内容は、担当者に任せている。担当者間の情報交換のために、定期的に打ち合わせ会議を行なっている。

#### ■ シラバス

- 共通部分で授業の理念とスキルを示し、「講義計画」で各教員の授業内容を示す。[資料参照]

#### ■ 授業展開のパターン

- ①リテラシー重視型
  - 読解能力、文章力(レポート作成)、情報リテラシーなど。
- ②コミュニケーション能力重視型
  - プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなど。
- いずれかに特化するタイプの授業のほか、両者をうまく統合しようとするタイプの授業も多い。  
→「ディベート」への傾斜

6

授業内容をできるだけ均質化するために、シラバスに工夫をしている【資料1を参照】。共通部分を設け、そこに授業の理念と獲得目標のスキルを掲げる。スキル獲得のための具体的な授業展開の方法は各教員が記述し、受講者はそれを読んで授業を選択する。実際の授業展開のパターンは、「リテラシー重視型」と「コミュニケーション能力重視型」に分かれる。両者を統合しようとする教員は、ディベートを重視する傾向が見られる。

## 4 アンケート調査から

- 2005年(導入2年目)に、1・2年次生を対象としたアンケートを実施。[資料参照]
- (1)大学入学時の不安
  - ①授業形態の相違に対する不安
  - ②履修システムの相違に対する不安
  - ③成績評価に関する不安(特にレポートと発表)
- (2)「知のナビゲーター」の満足度
  - 受講者の8～9割が授業内容に満足し、熱心に授業に取り組む。
  - 同じ割合の受講者が、スタディ・スキルが向上したと回答。

7

2005年に1・2年次生を対象としてアンケートを実施した【資料2】。その結果によれば、学生は大学入学時に、授業形態の相違、履修システムの相違、成績評価(特にレポートと発表)などについての不安を強く抱えていることが分かった。また、「知のナビゲーター」の受講者の8～9割が授業内容に満足しており、同じ割合の受講者がスタディ・スキルの向上を感じていることが判明した。

- (3)身についたスキル、つかなかったスキル
  - 書く力、討論する力、情報リテラシーなどは、成果を実感しやすい。
  - 逆に、読む力やプレゼンテーションは効果を感じにくい傾向。
  - モティベーション・テーマ発見がもっとも低い。
- (4)スタディ・スキル教育の必要性
  - 未履修者のうちの半数が、授業内容に対する情報不足と、無関心から受講していない。
  - 自分のスタディ・スキルに自信を持ち、履修を望んでいない者が、無関心層の半数。(全体の1割強?)

スタディ・スキルのうち、書く力、討論する力、情報リテラシーなどは成果を実感しやすいが、逆に、読む力やプレゼンテーションについては、なかなか効果を実感しにくいことが分かった。また、スタディ・スキルに無関心な学生層も一定数存在していることが判明した。



## 5 「知のナビゲーター」の課題

### (1) 必修か選択か

- 新入生の大多数は、「知のナビゲーター」履修を希望。(06年度は9割近くの学生が履修希望、抽選で約半分に絞る。)
- 授業時間数の増加が課題
  - コマ数確保の問題
  - 担当教員確保の問題: 毎年公募するも、応募者は数名程度。

### (2) 導入教育全体の中での役割

- 「学びの扉」「知へのパスポート」との有機的連関
- 専門教育への接続に果たす役割

9

新入生の大部分は「知のナビゲーター」の受講を希望しているが、抽選で半数程度に縛らなければならない状態である。この状態を改善するためには、コマ数の確保と担当教員の確保が不可欠であるが、難しい状況である。また、導入教育全体の中で、専門教育への接続の役割をどのように考えるかということも、重要な課題である。

### (3) 教員の問題

- 大部分の教員は認識不足、無関心
  - 1年次生特有の問題に無知
  - スタディ・スキルより専門教育
  - スタディ・スキルが専門教育に果たす役割を過小評価
- 担当教員の固定化

### (4) 授業内容のコントロール

- コントロールなしに授業を組み立てられるのは、担当教員に熱意と能力がある場合のみ。
- 担当教員が多くなるほど、コントロールが必要。
- しかし、熱意と能力のない教員ほど、授業内容のコントロールを嫌う。

10

多くの教員は、初年次教育に対して認識不足かつ無関心であるといわざるをえない。それは、スタディ・スキルの意味を過小評価し、専門教育をより重視しようとする考え方に由来していると思われるが、しっかりしたスタディ・スキル教育が確立していなければ、専門教育も効果的に進められないことを認識すべきであろう。教員を増員すると、授業内容のコントロールの必要性が強まるが、コントロールへの反発は逆に強くなる。

## 6 共通テキスト作成の試み

- テキスト『知のナビゲーター』を、くろしお出版より出版(2007年3月初旬出版予定)。
- テキストのコンセプト
  - ① 専門教育との接続
    - 専門教育の中で(さらに、社会に出てからも)役に立つスキルの育成として位置づける。
    - 専門教育における議論の読解やレポート作成、ゼミでのプレゼンテーション、ディスカッションなどを意識した内容に。

11

こうした状況に対処するため、現在、新しいコンセプトを盛り込んだ、共通テキストを作成中である。

第一のコンセプトは、専門教育との接続を重視した点にある。スタディ・スキル教育を、専門教育に直結したものにすることで、専門教育志向の教員の意識を変えることが狙いである。

### ② コミュニケーション能力育成の重視

- 1年次生は、リテラシーだけでなく、コミュニケーション能力の向上も期待。
- 少人数のディスカッションや、ディベートなどは、授業への参加意欲や満足度を高める。
- ディベートは、あらゆるスタディ・スキルを駆使しないと成立しない。(スキルの有機的統合化)

### ③ 「コントロール型」と「放任型」の中間形態

- ワークシートの充実。
- 「授業マニュアル」を作成し、複数の授業展開例を提示。(1つの枠にはめるのではなく、多数の部品から自由設計できるシステムに。)

12

第二のコンセプトは、コミュニケーション能力育成の重視である。これからのスタディ・スキル教育において重要度が増す分野と考え、積極的に取り入れた。

第三のコンセプトは、実際の授業での利用法の工夫である。授業内容を縛るのでも、完全に教員任せにするのでもない、中間型を目指している。

## ■『知のナビゲーター』目次(予定)

### 第Ⅰ部 リテラシーをみかく

- 第1章 ノート・テイキング
- 第2章 情報を集める
- 第3章 リーディング
- 第4章 ライティング

### 第Ⅱ部 コミュニケーション能力をみかく

- 第5章 プレゼンテーション
- 第6章 ディスカッション
- 第7章 ディベート

13

以上のようなコンセプトに対応させるために、テキスト『知のナビゲーター』は、二部構成とし、全7章で構成される。授業の獲得目標スキルに対応させ、スキルごとに一章にまとめてある。

## 【資料1:「知のナビゲーター」シラバス】

■担任者名 中澤 務

### ■講義概要

【「知のナビゲーター」の目的】〈全クラス共通〉

文学部のどの専修に進むにしても、大学生として学んでいくためには、いくつかの基礎技能を身につけておく必要がある。この「知のナビゲーター」の目的は、特定の専修に進むために必要な知識の習得ではなく、大学生として学ぶためのスタディー・スキルの育成にある。それは具体的には次のようなものである。

- (1)資料のポイントをつかむ:文献・資料を的確に読む能力。
- (2)レジュメ・サマリーを作る:文献・資料の内容をまとめた文章を作成する能力。
- (3)レポート・論文を書く:テーマに応じて、自分自身の見解をまとめた文章を作成する能力。
- (4)プレゼンテーション:調査した内容や自己の見解を口頭で発表する能力。
- (5)ディスカッション:発表内容を的確に聞き取り、質疑、議論する能力。

(6)モチベーションを高める:人文学の研究への動機づけやテーマ発見。

(7)図書館・コンピュータの利用技術:その他、大学での学習に必要な技術の習得。

これらのうち、どのスキルを重点的に扱うかはクラスによって異なるので、下記の「このクラスの概要」と「講義計画」を参照すること。

#### 【このクラスの概要】

このクラスでは、(1)資料のポイントをつかむ、(2)レジュメ・サマリーを作る、(3)レポート・論文を書く、(4)プレゼンテーション、(5)ディスカッションなどのスキルを重点的に扱う。これらのスキルの育成のために、このクラスでは、“問題を論理的・批判的に考察して、説得的な意見を作り出す技術”(「ロジカル・シンキング」、「クリティカル・シンキング」)の訓練を中心に授業を進めたい。授業では、「講義計画」にある様々な方法を駆使して、この技術を総合的に習得していく。

#### ■講義計画

「講義概要」で説明した知的能力を養うために、以下のようなかたちで授業を進めていく予定である。

##### I 論理的思考の基礎を身につける

論理的・批判的に考えるために必要な基礎知識を学ぶ。

##### II 議論を読み解き、批判する訓練

新聞の社説などを教材にして、議論を読み解く訓練を行う。

また、論理の弱点を発見して批判する訓練も行う。

##### III 説得的な議論を構築する訓練

説得的な議論を作り出すためにはどうすればよいかを学ぶ。また、これと平行して、レポートの作成方法(テーマの見付け方、資料調査の方法、議論のまとめ方、原稿の書き方など)を学ぶ。

##### IV プレゼンテーションと応答能力の育成

自分の意見を説得的にプレゼンテーションする力と、質問や批判に対して的確に応答できる能力を育成する。

##### V ディベート

最終的な仕上げとしてディベートを行なう。ディベートは上述の知的技能すべてを使う知的競技だからである。準備から対戦までの一連の作業を経験することで、知的スキルの総合的な向上を目指す。

※その他、合宿(自由参加)や図書館ガイダンスを行なう予定です。

【資料2:「知のナビゲーター」に関するアンケート結果(2005年7月実施)】

1年次		2年次	合計
受講者	未受講者	受講者	
100	153	38	291

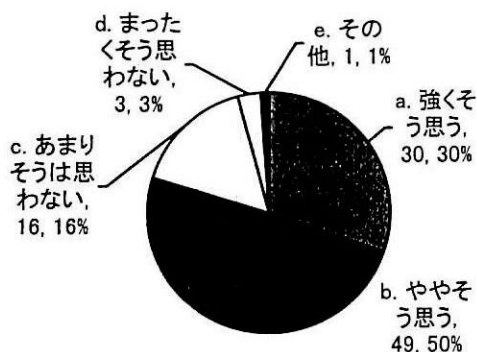
(回収率 26.6%)

■大学入学時の不安【抜粋】

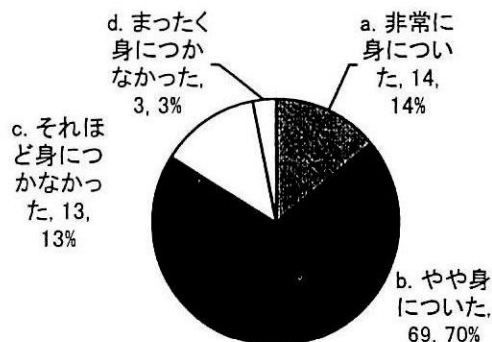
- ★勉強についていけるか。高校までとは違い、覚えるだけでなく自分で考え出さなければいけないことに不安だった。
- ★90分というひとコマ当たりの授業の長さ、テストの形式など。
- ★高校の時とは全く違う授業科目ばかりだったので、どんな風なのか、またついていけるかどうか不安がありました。
- ★履修のやりかたがよくわからなかった。何を何単位以上とらなければならないかなど。
- ★レポートの課題がたくさん出されると思っていたので、書き方などがわからないため不安でした。
- ★テストの形態が高校と違うことに対して。入学後、レポートの書き方を習うことなくレポートが出て焦りました。
- ★どんな試験なのか。論文レポートなどはどう書けばよいのか。
- ★発表などちゃんとできるか。
- ★大学の先生は板書を丁寧にしないと聞いていたので、ノートを上手に取れるか。

■満足度、スキルの向上 (2005年度受講生)

「知ナヴィ」の授業内容は期待どおりでしたか

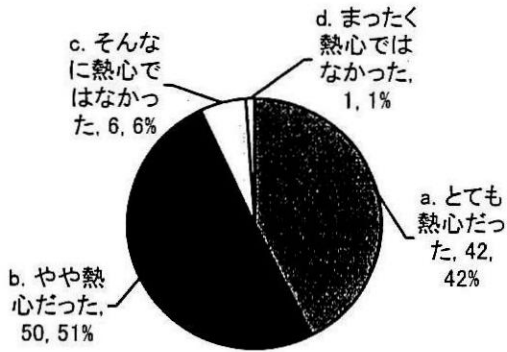


大学で学習していくために必要なスキル(技術)は身についたと思いますか

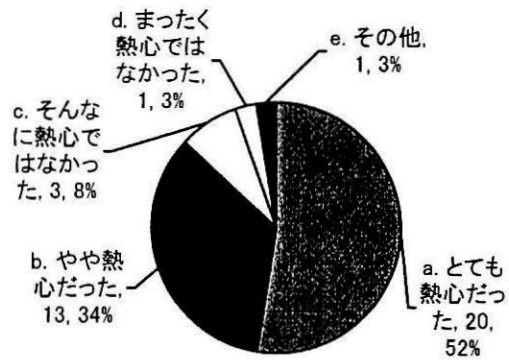


■ 熱心さ

質問11. あなたは熱心に「知ナビ」の授業に取り組みましたか

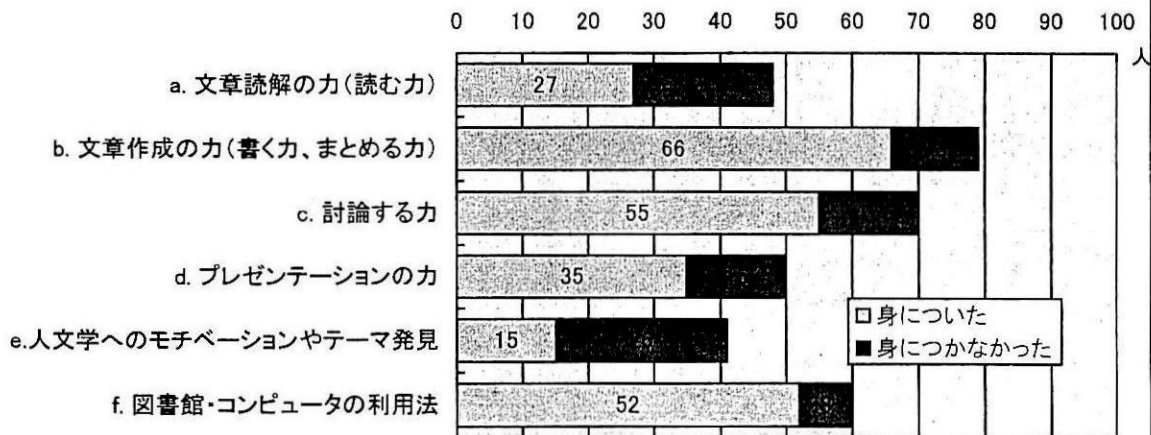


質問11. あなたは熱心に「知ナビ」の授業に取り組みましたか



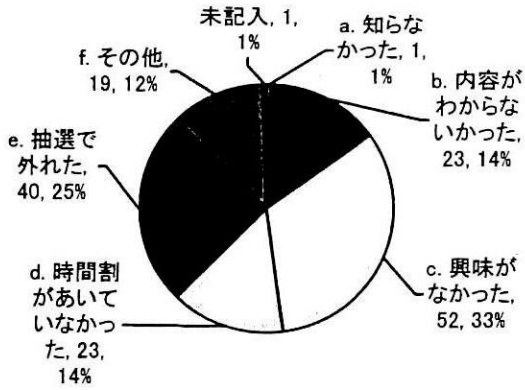
■ 身についたスキル・身につかなかったスキル

(2005年度生)

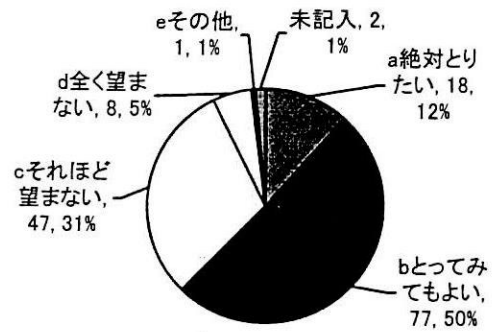


■なぜ、「知のナビゲーター」を受講しなかったか？

なぜ履修しなかったのですか

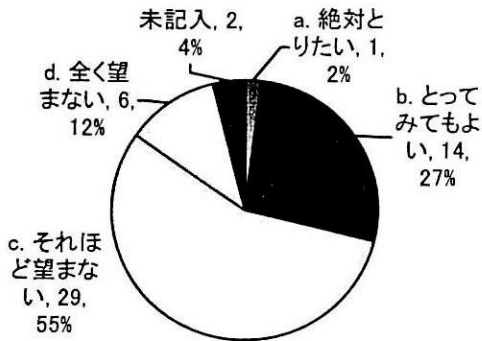


今後「知ナビ」と同様の授業を履修する機会があれば、とってみたいですか

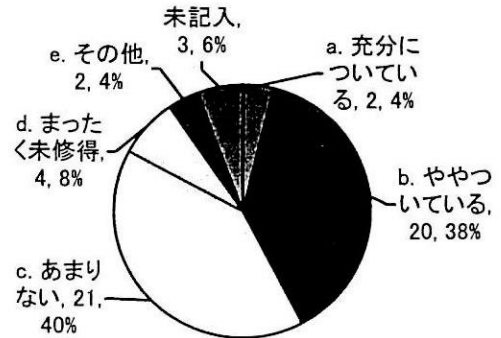


「興味がなかった」と答えた者のうち・・・

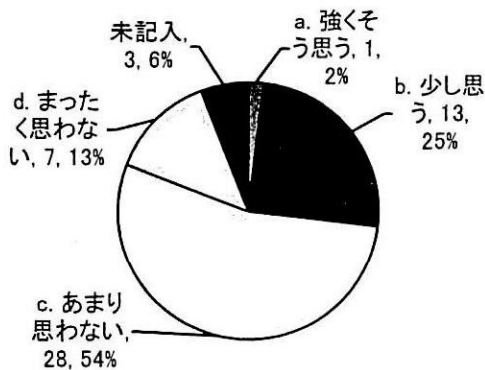
今後「知ナビ」と同様の授業を履修する機会があれば、とってみたいですか



「知ナビ」の授業を履修していなくても、「知ナビ」で習うスキル(技術)を身につけていると思いますか



「知ナビ」の授業を履修しておけばよかったと思いますか



## 5. パネルディスカッションの内容

パネルディスカッションは、早稲田大学文学学術院助教授の沖清豪氏をコーディネーターとして行なわれた。まず、コーディネーターから、初年次教育における教員の関わり方を考えるうえでのポイントとして、次のようなものがあることが指摘された。

- ①教材やシラバスをどのように作るか。
- ②授業の形態をどうするか。必修にするか、選択にするか。
- ③少人数クラスの運営。担任制にするか。また、個別的な指導のあり方をどうするか。
- ④FDの問題。研修などをどのように取り入れるか。
- ⑤マネジメント（授業の運営方法）の問題。

さらに、こうした問題に加え、最終的には、「評価」のあり方が問題となる。すなわち、初年次教育プログラムの成果をどのように算定し評価するのか、そして、プログラムを受講した学生に対して、どのような評価を評価を行なうのがふさわしいのかといった問題である。

これらの問題に関して、三人のパネリストから、各大学での取り組みに関して順番に説明がなされた後（具体的な発言内容は煩瑣になるので避ける。（2）～（4）の各パネリストの報告内容を参照していただきたい）、フロアからの質問が紹介され、パネリストがそれに答えるかたちでディスカッションが進められた。主な質問は、以下のとおりである。

- 初年次教育におけるPCの活用について。
- 初年次教育における上級生の利用方法について。（TAやメンターとしての活用、どのような役割を担わせるか。雇用方法など。）
- 学生の成績評価のあり方。（基準、公平性・客観性の確保など。）
- 教員評価の方法と、その結果の利用について。
- 初年次教育に対する教員の関わり方について。（一般教員にどのように理解を得ているか、担当者のFDの具体的な方法など。）

これらの質問に対して、各パネリストが適宜コメントを加えるという仕方で議論が進行したが、傾向としては、これらの問題に対する対処は、関西国際大学がもっとも統制がとれ、進んでいるという印象であった。関西大学文学部の場合、いずれに関してもまだ十分な体制が取れていないが、しかし、努力をしていないわけではない。重点領域研究のテーマである情報教育との連携のヴィジョンや、TAの活用の試み、教員間の情報交換のやり方など、具体的な取り組みを報告した。

時間不足で、踏み込んだ議論に至れなかったのが残念であるが、初年次教育をめぐる現在の問題点が浮き彫りになるとともに、改善に向けての様々なヒントが得られたことは、大変有益であった。